

「悔いのない人生の秘訣は その都度の『決断』にあり」

いけだ きくお
池田 規久夫 様

「若くしての挫折、妻との出会い」

一応裕福な家庭で育ち、国立大学を卒業後、工場に勤務、と順風満帆な人生でした。しかし20代の半ばに胸をやられ咯血してしまい、仕事を辞め入院生活をせざるをえなくなりました。当時は不況で賃金も3回に分けて支払われる世情、回復しても、胸を患って1年以上も療養した者が就職することは大変難しいことでした。そんな時支えてくれたのは家内です。家内とは毎週土曜日、御影の知人宅で開かれるダンスパーティで知り合いました。10歳上で、よく言うフィーリングが合い（実はひと目ぼれ）、だんだんパーティ以外でも会うようになっていきました。家内の存在が大きくなりいざ結婚、となった時、身内は猛反対。また家内は、跡継ぎがない自分の母方の姓を名乗ることになっていましたので、悩んだ末、ふたりで暮らすために家を出、私は姓を変えることを決めました。暑い夏の日、平安神宮で家内と挙げた式のことはいまでもよく覚えています。



「夫婦で決断、バーテンダーへの道」

私の体調が落ち着いた時夫婦で真剣に話し合い、思い切って、当時大流行のハイボールスタンドを開くことを決めました。私は30歳でした。バーテンダースクールにふたりで通い、プロを目指し一生懸命勉強しました。このころは家庭でお酒を楽しむという習慣は少なく、特にクリスマスなど、男性諸氏がBARで飲んだ後サンタ帽をかぶって、クリスマスケーキ片手にほろ酔い気分でご帰宅・・・という時代。BARを始めてから1～2年はとにかく忙しくひたすら働きました。政治、芸術、恋愛の話など、サラリーマンや学生が集まり、大変活気がある店でした。

そんな時残念にも、2度目の咯血がありました。医者から、一か八か試してみないか、という薬の相談があり投薬したところ、運良くそれが効いて命拾い。胸の病は完治しました。再び、仕事に戻れるようになり、ありがたいことでした。

「里で30年、思い出の詰まった人生そのもの」

50代の終わりの頃、店の近くにゆうゆうの里の開設事務所ができました。私達夫婦には子供がいなかったので、以前からホームの入居は頭の片隅に置いていました。自宅近くの守口、宝塚の施設の他、評判が良いという熱海にまで見学に行きました。「今、通勤できる所」「将来的に環境の良い所」を考えた末、ここに決めました。老人ホームは一般的に暗く寂しいイメージとされていたので、周りから「そんな所に入らなくても」とあまり喜ばしくない言い方をされました。

入居したときはまだ入居者が100人ぐらいで、全員の顔と名前はみんなが知っていて、まさに大きな大家族の大きな団らんのようなものでした。皆で今から立ち上げよう、自分達がここを創って行くんだという意気込みに溢れていました。また勤めている人も多く、ご多分にもれず私も仕事を続け、毎晩帰宅は午前1時で

したが、入居後17年間75歳まで梅田まで通いました。

入居して30年が経った今、同年代のみんなはそれぞれ良い歳の取り方をし、また当然のことながら変化もありました。私も家内が亡くなり今は一人暮らしです。宵っ張りの習慣は抜けず朝はガウン姿でゆっくり過ごし、午後は喫茶でコーヒーを嗜んだり散歩を楽しんだり。アスレチックジムや趣味も続けています。自分なりのペースで過ごせていて居心地は大変良い。30年前、ここに入居しようと決めた選択は正解だったなあ、と思っています。



趣味のひとつのランプ。
熟練の手さばきです！